

VTR「全日本高校・大学ダンスフェスティバル受賞作品集」の教材的価値

高橋 るみ子

1. はじめに

『ダンスの教育学1』において松本は、「映像による研究がこれからの舞踊文化の保存と研究・教育の開発に負う役割は大きい」と述べ、中でも学習の場での映像を用いての学習研究の重要性を指摘し、「未だ確かな成果が報告されていない学習者の鑑賞力を観る研究方法」と「創作及び舞踊全般への興味・関心の深まりになるような教育における新たな映像の活用方法」の二点の提出を今後の研究に求めている(注1)。一方ダンス学習の場に目を転ずれば、さまざまな映像資料が溢れ、どんな映像をどのように活用すれば学習教材としてこれらの映像をより有効に役立てられるのか、あるいは生徒にダンス文化をさらに身近なものとして受け止めさせることができるのか。手探りの状態である。そこで本実践は、すでに学習の動機づけとしての活用とその成果が報告されている映像資料『全日本高校・大学ダンスフェスティバル受賞作品集』の、教材としての新たな価値と活用方法を探ることを目的に、舞踊の鑑賞学習を設定し、その学習成果から考察を行うものである。

2. 実践方法

今回の実践を進めるに先立ち、平成元年度より保健体育理論(一般科目・必修)の授業において、映像による「ダンスの鑑賞」の授業(90分)を実施し、学生のダンスの鑑賞力を高め、ダンスへの興味・関心を深める鑑賞学習の方法を探ってきた。今回はより高い学習効果を上げるために、学習者に「作品の成り立ち自体を知らせる」(注2)分析的な観点を与えるチェックリストを追加した。

実施年月日 平成5年1月28日
授業名 保健体育理論 第7次 (90分)
対象 教育学部 2年生151名
(女子 93名・男子 58名)
映像資料 92.8.22 NHK教育テレビ放映の『第5回全日本高校・大学ダンスフェスティバル』受賞作品の録画(大学の部・9作品)
課題 (1) チェックリストへの記入
(2) “最も好きな作品の選択と選択理由”及び“授業の感想”

※チェックリストでは、作品名や字幕・解説等で知らされる作品の「テーマ」と、7モーティブの中から選択させた作品の「情調」

が、それぞれ「身体・表情・動き・構成・曲・衣装・照明・小道具」の何から最も強く感じられたかをチェックさせた。

3. 結果と考察

チェックリストを集計し、各作品の評価文と内省文を質的及び量的に分析した。結果、収録されている作品がもつ a. 臨場感 や b. 多様さが、学習者の c. 新鮮な体験 d. 真剣な取り組み e. 興味・関心の高まり f. ダンス観の確立・拡大 といった学習成果につながったことが明らかになった。さらに個々の作品の受賞理由(コンクールの審査の観点)と学習者の評価の視点を比較することにより、今回の学習集団の g. 鑑賞力を推察することもできた。以下に具体的に述べる。

- 多数の学生は演者に対し“気持ちよさそう”“楽しそう”と感じ、“自分も楽しかった”“身体を動かしたくなった”“一緒に踊ってみたい”と述べ、“自然に身体が動いた”と「共感覚」(注3)の体験を報告する。また会場の臨場感についても“目に見えてきそう”“あまりの迫力に背すじがゾットした”“その場にいるように引きこまれた”と述べる。これは収録されている作品が、同世代の出演者が「自己とむきあい自身をかけて演じた」(注3)作品であり、映像になっても神戸文化ホールでの演者と観者の出会い・臨場感を再現する力を持っていることを示している。
- 各作品の“情調”を集計した結果、7作品に対し50%以上の学習者が同一の“情調”を選択していた。その内訳は、「寂かな感じ」「躍動的な感じ」の作品が2、「寂しい感じ」「流れるような感じ」「楽しい感じ」の作品が1と、テーマも情調も多様な作品が収録されていることが明らかになった。この多様性は、“ダンスにもいろいろあることがわかった”“作風もさまざま”“こんな表現もあるのか、こんな動きでこんなふうに見えるのか”といった学習者の記述からも伺うことができる。
- 「ダンスの新鮮な体験」を述べている学習者が多く、中でも“このようなダンスはNHKでもめったに(放映)しない”“普通では見ることができない”だから“こんな機会に見ることができてよかった”といった記述からは、今回の授業に対する肯定的な評価が読み取れる。
- “はじめてじっくり鑑賞した”“ダンスをきちんと見ることができた”“まるで自分がその会場で審査員をしているかのような感じ”等の記述は、学習者の真剣な取り組みを想像させる。
- ダンスへの興味・関心に触れた記述からは、学習を通して学習者の興味・関心が高まっていく過程と、この興味や関心が同世代の演者に対

する共感や感動，さらには「生き生きした生命感があふれる」作品から始まり「創作作品として完成度が高い」作品で終わる編集や字幕で加えられたテーマ・解説によってもたらされたものであったことを伺わせる。ダンスは“わからない”“興味がなかった”学習者は，同世代の演者のダンスに“感動した”“楽しかった・おもしろかった”“考えが変わった”“好きになった”“ダンスがわかった”と感じ，“もう一度”“カットされていない作品を”“ぜひ生で”あるいは“高校生の作品も”“受賞作品以外も”“別のダンスも”「みたい」といったより詳しく広い観るダンスや，自分も“やってみよう”“出てみたい”といった行なうダンスへの願望を述べるに至っている。

f. 「ダンスの特質に触れることによってダンス観は確立・拡大されていく」(注4)ことから，まずダンスの特質に触れた記述を抽出した。結果，学習者は実に多彩にダンスの特質をとらえていたことが明らかになった。中でも“感じたものはテーマ以上”“自分自身が自然に表現されている”“魂に直接訴えかける”“ダンスは現代人の抱えている問題を考えさせる”“動き・音楽・衣装・照明のすべてがマッチしているとわかりやすい”などは，松本が論じているダンス観の中の「動きの総和以上の表現性」「作を提出することは自分自身の人間観を差し出すこと」「観る人の心に刻まれて感動を残す」「ダンスの作品は今と切り離せない」「音と融けあい・・・発想に導かれ選択された衣装・小道具や装置に包まれ，あかりによって生命を吹きこまれつつ総合的な表現として出現し」(注5)と一致し，ダンスの本質をはっきりつかんだ学習者の存在を伺わせる。さらにこの抽出文を舞踊運動課題の4視点(極限性・多様性・連続性・表現性)(注4)に分類すると，「表現性」に関する記述が非常に多く，逆に「連続性」に関する記述がわずかであることに気づかされる。この偏りは，映像鑑賞によって確立・拡大されるダンス観に限界があることを示唆していると考えられる。

g. 各作品に対する学習者の評価内容を審査の観点 ①すぐれた動きの探求 ②ユニークな発想 ③生き生きした生命力あふれる表現 ④すぐれた主題の展開・構成 ⑤音・音楽，衣装，装置 ⑥創作作品の完成度の高さ に6分類し，学習者がコンクールの審査と同じ観点から作品の良さ・美しさ・意味を受け止めているかを探った。結果，学習者はすべての作品に対し審査と同じ観点から，審査に近い評価を行っていたことが明らかになった。一方チェックリストの集計からも学習者の作品のとらえ方が審査の観点と

一致していたことが判明した。例えば，学習者の68%がテーマは「衣装」から最も強く伝わったと回答した作品は「自作の衣装デザイン」に対する特別賞が，同様に学習者の51%がテーマは「動き」からと回答した作品は「すぐれた動き」に対する特別賞が与えられていた。このように全ての作品に対し，コンクールの審査と同じ観点から審査に近い評価を行なった今回の学習集団は，“はじめてダンスを鑑賞した”と記述した者が多かったにもかかわらず高い鑑賞力をもっていたことが認められた。と同時に学習者の鑑賞力は舞踊に関する学識の多少だけでは測れないものであることも明らかになった。島内が「批評家は，豊かな体験・鋭敏な感受性・本質を読む直感力そして舞踊に関する深い学識をもって・・・作品の意義や価値を明らかにする」(注6)と述べているが，この内の体験・感受性・直感力はさまざまな文化との関わりで獲得されるものである。今回認められた高い鑑賞力は，大学生である学習者がダンス以外の文化との関わりでそれまでに得たさまざまな知識に支えられたものであったと推測される。

4. おわりに

以上NHK編集『第5回全日本高校・大学ダンスフェスティバル受賞作品集』のVTRが，学習者の創作及び舞踊全般への興味・関心を高め，学習者の鑑賞力を測る映像資料であることを報告し，学習の場での効果的な一活用方法を紹介した。特に今回は松本の「鑑賞ではよき出会いを可能にする手だての一つとして分析的な観点も役立つ」「動きの総和以上の表現性を読みとるためには作品の成り立ち自体を知ることが必要」(注1)に着目しチェックリストを作成したが，学習者には“こういう形式で問題が出されたので，本来なら動きと表情にしか注目できないところが照明・構成・衣装から作品の完成度をみるのができた”等，予想以上に好評であった。

本実践では学習集団の鑑賞力を観るに止まったが，今後は学習者ひとりひとりの鑑賞力を観る研究方法の追及も課題の一つとしたい。

[注]

1. 松本千代栄；映像による研究『ダンスの教育学1』p.284 1992 徳間書店
2. 松本千代栄；舞踊の鑑賞2—作品を創る・観る「女子体育」30-5 p.64 1998
3. 松本富子；発表会とコミュニケーション『ダンスの教育学5』p.251 1992
4. 山田敦子；学習の成果をとらえる『ダンスの教育学1』p.245
5. 松本千代栄；演じる世界と論じる世界，ダンスと上演『ダンスの教育学5』p.5, p.7
6. 島内敏子；批評と評論『ダンスの教育学1』p.156